

巻頭言

副会長 淵本隆文

イギリスのロンドンで8月4日から第16回世界陸上選手権大会が開催された。男子100mの世界記録(9秒58)保持者であるウサイン・ボルトは、この試合で引退を宣言して注目されたが、結果は3位(9秒95)であった。世界記録を樹立した2009年8月のレースでは、8名全員が横一線でスタートし、40mまでにボルトが約1mリードして、そのまま逃げ切った。しかし、今回のレースでは、スタートでボルト1人が出遅れ、後半に追いついたが、少し足りなかった。ボルトの身長は196cmであるが、今回優勝したジャスティン・ガトリンは185cmである。タイソン・ゲイは178cm、カール・ルイスは188cmである。ボルトは世界の一流選手の中では明らかに身長が大きい。身体が大きくなると、体重が大きくなり、腕や脚の慣性モーメントも大きくなるので、特にスタートダッシュでの加速においては不利になると思われる。逆に言うと、ボルト以外の選手はスタートダッシュでボルトより前にでなければならない。これらのことから考えると世界記録を樹立したレースで、ボルトがスタートダッシュで飛び出したことは信じがたいことであり、だからこそ9秒58の驚異的な記録が生まれたのである。

大阪体育学会は、日本体育学会と比較すると、身体(規模)が小さいのでパワーは少ないが、俊敏性(機動力)においては有利である。今年から日本体育学会との関係において学会運営の環境が変化しており、これに対して機敏に対応していく必要がある。その一つとして、本年度から受理された投稿論文が随時ホームページにアップされることになった。これは会員にとって大きなメリットである。研究会や講演会等の継続的な開催も含めて、会員にとって一層魅力ある学会にするにはどうすればよいのかを、会員の皆さんと一緒に考えていきたいと思っておりますので、ご協力をお願いいたします。